

Digest of Science of Labour

労働の科学

2023
August
Vol. 78, No. 8



500個の木の作品／菅沼 緑

特集

生産者の誇りを胸に社会貢献を

花に心を添えて一バラ農園の挑戦／稲毛朋信
シルバー営農で仲間と豊作を喜び合う／阪口俊治

巻頭言

「怪我と弁当は自分持ち」を
Z世代はどう受け止めるのか
松田文子

新連載

軽労働化で農業の再生①
宇土 博

連載

労研アーカイブを読む⑨⑩
椎名和仁

漂流者たち—クミジョの肖像②⑨
本田一成

ILOインド南アジア産業安全保健通信⑧
川上 剛

労働の科学

2023
August
Vol. 78, No. 8

巻頭言

俯瞰 (ふかん)

「怪我と弁当は自分持ち」を
Z世代はどう受け止めるのか

1

松田 文子 [大原記念労働科学研究所 総務部長]

表紙作品：菅沼 緑「500個の木の作品」

材料：木材

会場：ギャラリーホワイトアート（東京・銀座）

年度：1983年

撮影：安斎重男



生産者の誇りを胸に社会貢献を

花に心を添えて—バラ農園の挑戦

..... [稲毛農園] 稲毛 朋信 4

シルバー営農で仲間と豊作を喜び合う

..... [所沢市シルバー人材センター] 阪口 俊治 9

Series

ILOインド南アジア産業安全保健通信 (8)

労働組合主導による産業安全保健活動..... 川上 剛 14

「#教師のバトン」で伝わる (26)

教職員の過酷な勤務環境..... 藤川 伸治 17

Series

漂流者たち クミジヨの肖像 (29) 『クミジヨ白書2021』(6)	本田 一成	22
軽労働化で農業の再生 (1) 農業の現状と人間工学的な問題点 総論	宇土 博	27
労研アーカイブを読む (90) 列車事故と運転保安装置	椎名 和仁	31

Column

2023年人類働態学会夏季研究会に参加して 人生が変わった2日間 この研修でしか得られなかったもの	松木 敬斗, 眞矢 大志朗, 丸田 幸奈	24
自由と想像 (8) 彫刻に向かって	菅沼 緑	38
Talk to Talk 気やそぞろ	肝付 邦憲	40
BOOKS 『もっと知りたい「怖い絵」展, 展覧会の「怖い絵」』 「恐怖」を孕んだ西洋名画展	椎名 和仁	44
『梶太一が聞く科学の伝え方』 科学研究の成果をどう伝えるか	井上 枝一郎	45
労働科学のページ		47
次号予定・編集雑記		60

「怪我と弁当は自分持ち」を Z世代はどう受け止めるのか

松田 文子



まつだ ぶみこ
大原記念労働科学研究所 総務部長

「怪我と弁当は自分持ち」——かつて、建設業を中心に多くの働き手に浸透した言葉であり、懐かしく感じる方もおられるだろう。この言葉には、怪我をしてしまうようでは一人前とは言えないという働き手の矜持や、怪我をせずに仕事をやり遂げるのだという責任感の強さを物語るなどポジティブな意味合いもあるが、怪我は自己責任、怪我で働けなくなっても誰も面倒をみてくれない、泣き寝入りするしかないというネガティブな意味合いもあるようで、私自身は、複雑な感情を抱いていた。

今日的な労災の捉え方からすれば、怪我をすることは本人の問題というよりは、むしろ、機械、環境、組織などシステムの問題である。しかし、Z世代（およそ1990年代半ばから2010年序盤に生まれた世代）の受け止め方はそうでもないらしい。彼らの時代、転落の危険から校庭のジャングルジムが消え、切創の危険からカッターナイフが使われなくなり、学校生活で「ちよつとした怪我」を経験することもなく、大人になった人も多いと言われている。Z世代にとって、生活の場のみならず、働く環境も「安全」であることは当たり前のことであり、そもそも、仕事中に怪我をする、仕事の内容によって健康を害するということがへ

イメージを持ち得ていないように感じる。大学の講義で「怪我と弁当は自分持ち」という言葉を紹介すると、10年くらい前までは「えー、そんな時代があつたのか」という反応であつたが、最近では、「そりゃそうだろう、怪我をする人が悪い」と受け止めている節がある。

これを、「今どきの若者は、なんて責任感が強いのだ」と喜ぶのは、いささか軽率であるように思う。そもそも、アルバイト先での怪我が労災になるという認識はなく、少々の怪我は自分が悪いと思つている。「バ畜（社畜のアルバイト版）」という言葉に代表されるように、アルバイトに必要以上に責任を感じたり、学業に支障をきたすほどのシフトを入れたら、その結果、心身の健康を損ねるような状況に陥ることも自己責任の範疇だと感じていようである。もちろん、労働法や安衛法を学ぶ機会がないことも、こうした考えに至る要因の1つであろう。

就職先の企業での研修などを通じて、考え方が変わることが十分にあり得るが、自分の中だけで処理してしまふ方が誰の迷惑にならないという気持ちが透けて見える。過度に寄り掛かることも、寄り掛かれることも望まないZ世代ならではの発想なのかもしれない。労研は、安全衛生部門の方を窓口とし

て業務を進めることが多いが、その先に見据えるべきは、第一線で働く人たちである。これからの30〜50年は、Z世代が中心的な働き手になる。Z世代は、「タイム（タイムパフォーマンス）」という言葉に象徴されるように、とりわけ時間的な効率を重視すると言われている。多様な価値観を受け入れつつも、慣れ合うことはしない。これだけみても、これまでの安全衛生の課題解決手段と相性がよいとは言い難い。

また、終身雇用へのこだわりや組織や企業への期待が薄く、安全や健康についても、人それぞれ、個人的な課題と考えている人が多いとすれば、いままでの考え方の延長、展開だけでは、解決し難い状況に陥るのではないだろうか。彼らの本質を探り、シーズを見出し、未来の安全と健康の課題解決に貢献できる労研でありたいと思う。